

# 大田区立山王草堂記念館版 記念館ノート



とっておきの一枚!

## 1937（昭和12）年1月17日、蘇峰（壇上）の講演風景

清明文庫（現・大田区立勝海舟記念館）にて、洗足池畔両英雄詩碑の建立式に合わせて講演会が開催された。蘇峰の背後には、詩碑拓本らしきものが見える。（大田区立郷土博物館所蔵）

## 第4号

発行：2020年3月31日  
編集：大田区立龍子記念館

## 館のトピックス

### ◆西郷隆盛の記念碑

洗足池には、西郷隆盛（一八二八～一八七七）薩摩藩士ゆかりの記念碑が二つあります。一つは、一八七九（明治十二年）に海舟が建立した西郷留魂詩碑（さいこうりゅうこんしひ）です。西郷の三回忌に合わせて、当初は葛飾区東四つ木に建立され、一九一三（大正二年）年、海舟の墓所脇に移されました。裏面には、海舟の筆で西郷を称える述懐が刻み込まれ、「明治十二年六月 友人 海舟」と記されています。初めに東四つ木へ建立した頃、西郷は新政府から朝敵とみなされていました。海舟は西郷を逆賊扱いせず、「友人」と明記しました。留魂詩碑の向かいには、一九三七（昭和十二年）年に徳富蘇峰ほか有志が建立した両英雄詩碑があります。勝と西郷が池上本門寺で対面した様子を劇的に詠った漢詩碑です。後に蘇峰が漢詩の創作秘話として「洗足池畔に遊び、海舟塔と、海舟先生の建立したる南洲翁留魂碑とに詣し、偶然左の二十八字を口占した」（『西郷南洲先生』一九二六年 民友社）と述懐しました。西郷自身が洗足池に強い思い入れがあったなど詳細は不明ですが、洗足池には海舟と蘇峰の縁で二つの記念碑が残されています。二〇二〇令和二年三月三十一日、山王草堂記念館では、一部資料、入替えを行い留魂詩碑と両英雄碑の全文や詳細などパネルで紹介しています。



手前・西郷留魂詩碑（裏面から）と向かい合う両英雄詩碑

## 2020年度の予定

### 1. 講演会

- 5月17日（日）「徳富蘇峰と政財界人」  
かつて大森山王界限には、清浦圭吾や桂太郎ら政財界人が居を構え、山王の蘇峰と交流をしていました。当館でこれについて講演を行い、終了後、尾崎士郎記念館と連携でギャラリートークを行います。

### 2. 散策会

- 11月22日（日）「馬込文士の足跡をたずねて」文士村散策会  
尾崎士郎記念館などと連携し、馬込文士の旧居跡やゆかりの場所を散策します。

### 3. 展示・公園のご案内

- 以下の日時に展示資料や蘇峰公園をご案内します。  
1月を除く、毎月第1土曜日（1月は9日（土）に開催） 各日13:00～13:50

※詳細は大田区報、情報誌『Art Menu』、公式ホームページ等に掲載します。

## 館の基本情報

### 《所在地》

大田区立山王草堂記念館  
〒143-0023 大田区山王1-41-21  
TEL 03-3778-1039  
URL <http://www.ota-bunka.or.jp/sanno>

### 《アクセス》

- ① JR大森駅より東急バス「上池上循環内回り」「新代田駅前」行
- ② 都営浅草線馬込駅より東急バス「上池上循環外回り」「大森操車場」行  
いずれも「山王二丁目」下車、徒歩約5分
- ③ JR大森駅西口より徒歩約15分

### 《入館案内》

- 開館時間 9:00～16:30（入館は16:00まで）
- 入館料無料 ●休館日 年末年始、臨時休館

# 徳富蘇峰の恩人

## （勝海舟と横井小楠）

大田区立山王草堂記念館学芸員 黒崎 力弥

### はじめに

徳富蘇峰（一八六三～一九五七 ジャーナリスト）と交流のあった人物は多い。神奈川県中郡二宮町の徳富蘇峰記念館では、蘇峰書簡を約四万六千通所蔵しており、差出人の数は約一万二千名とされている。そのすべての人と蘇峰が親しく交流したわけではないが、蘇峰の交際範囲の広さをうかがわせる人数である。蘇峰自身、交際範囲の広さを認め、その中でも真の恩人と認めたのは四人であると断言した。明治新政府の礎を築いた思想家・横井小楠（一八〇九～一八六九）、小楠の第一門弟で蘇峰の父・徳富一敬（一八二二～一九一四）、蘇峰が生涯の「先生」として慕った教育者・新島襄（一八四三～一八九〇）、そして、蘇峰が住み込みで教えを受け、思想上だけでなく、その人となりにも影響を受けた旧幕臣・勝海舟（一八二三～一八九九）の四人を、蘇峰は「四恩人」と称した。今回はこの四恩人の中から、徳富一敬・蘇峰親子二代に亘ってゆかりがあった海舟と小楠について、蘇峰の文献をもとに考察する。

### 徳富親子と勝海舟

徳富親子と勝海舟の縁は、横井小楠を介して始まった。海舟は福井藩の藩政改革を成功させた小楠を尊敬しており、小楠を「先生」と称して交流していた。一八六四（元治元）年、海舟の代理人として坂本龍馬（一八三六～一八六七 土佐藩郷士）が小楠を訪ねた際、徳富一敬は書記として同席した。一八七一（明治四）年には、最後の熊本藩主・細川護久（一八三九～一八九三）とともに一敬が上京し、この頃から海舟と本格的な交流が始まっている。一八八七（明治二十）年、海舟が赤坂に暮らしていた徳富親子を水川（現・港区赤坂）の自邸に迎えることになる。海舟は徳富親子のために別棟を新築したことから、海舟が徳富家に並みならぬ敬意を持っていたことがうかがわれる。興味深い点として、蘇峰は海舟を恩人として称賛しながらも、非常に身近な間柄をうかがわせる文獻をいくつか残している。

勝さんと親しく識ることが出来、且つ教えを受けることが出来たということは、予にとつては大いなる光栄であり、大いなる愉快であり、且つ同時に大いなる誇りでもある。勝さんの門人というものは山ほどある。その門人のうちには、

維新の新秩序を打出した薩長連合の鎖ともなり媒酌人となった坂本龍馬もある。口広き話であるが、いわばわれ等も亦その坂本等と、時を隔てたる同門の士であるということは何たる愉快であるか。「勝海舟先生」（『蘇翁感銘録』一九四四年 実雲社）

蘇峰が四恩人を語る時、父親の一敬以外は、客観的に語る際に敬称を略し、主観的に語る際には「先生」を付けた。時に、海舟だけ「さん」付けて語ることがあり、文面もいくらか軽さが見受けられることから、蘇峰は海舟を恩人として尊敬の念を抱くことにも身内と接するような親しみを感じた恩人であったと思われる。

### 徳富親子と横井小楠

徳富親子の恩人であり、海舟が偉人と評した横井小楠はいかなる人物であったか。一八四五（弘化二）年、小楠は私塾小楠堂を開き、徳富一敬をはじめ、二十名余りの門下を育てた。当時の熊本藩藩校・時習館の教育方針は、朱子学を重んじており、実学主義の小楠から見ると、時習館の教育方針は旧態依然のものであった。小楠は教育面から藩政改革を試みたが、守旧派の反対によって失敗に終わった。一八五七（安政四）年、熊本を離れて福井藩主・松平慶永（春嶽）に迎えられ、福井藩の藩政改革に取り組んだ。この頃、海舟等幕臣や坂本龍馬など志士と交流し、彼らに大きな影響を与えた。福井における藩政改革は順調に進み、国是七か条（後の五箇条の御誓文の礎）をたて、参勤交代の廃止などを実現した。明治維新後、徴志参与として新政府に召集されるも、一八六九（明治二）年に京都にて暗殺された。現在、郷土・熊本には旧居が保存され、横井小楠記念館が隣接して建てられている。小楠が世を去った頃、蘇峰は六歳の少年で、生前の小楠から教えを受ける機会は無かったが、小楠を四恩人の一人としたのは、蘇峰の父・一敬の師であったこと、徳富家の親族であったことが主な理由であった。徳富家は横井家と姻戚関係があり、小楠の後妻・津世子は一敬の妻・久子の妹で、母方をたどると小楠は蘇峰の義理の叔父にあたる。また、貧しい下級藩士であった横井家を裕福な郷士であった徳富家が支えており、幼少期から蘇峰自身、小楠に対する徳富家の態度を、信仰心に近いものとして感じ取っていた。

予の家庭も母の家庭も、みな小楠崇拜者の家庭であつて、小楠先生といへば、予が父の如きは殆ど人間以上の人として尊崇していた。それで二口目には小楠先生と言ひ、予が家の如きは

殆ど小楠先生に奉仕するために出て来たのではないかと思はるるほどであった。予はこの雰囲気のうちにあつて、勢い小楠に私淑せざるを得なかつた。「横井小楠先生」（『蘇翁感銘録』一九四四年 実雲社）

実際に面識はなくても、徳富家全体に漂う小楠崇拜の精神から、蘇峰は小楠の影響を強く受け恩人の一人とした。特に蘇峰は、小楠が封建制度の時代に、海外に目を向けた見識を高く評価していることから、後に蘇峰が記者活動をする規範になったものと思われる（註1）。

### まとめ

徳富親子にとつて海舟は、徳富家別宅「老龍庵」の扁額（山王草堂記念館所蔵）や海舟絶筆となつた書（山王草堂記念館に複製を所蔵）を気軽に依頼出来るほど親しい存在であった。また、横井小楠は、徳富家が代々思想を継承するような存在であった。一時期、海舟や小楠ら旧幕臣を過小評価する風潮があつたものの、蘇峰が『勝海舟伝』や『小楠遺稿』等をまとめたのは、恩人であり、後世に伝えるに足る人物として二人を評価したからではなからうか。

### 主要参考文献

- 徳富蘇峰『勝海舟伝』一九三二年 改造社
- 徳富蘇峰『我が交友録』一九三八年 中央公論社
- 徳富蘇峰『蘇翁感銘録』一九四四年 実雲社
- 大田区立勝海舟記念館編『勝海舟記念館図録』二〇一九年 熊本市教育委員会編『近代日本の先駆者 横井小楠』一九八一年



原田直次郎画 横井小楠肖像（1891年）  
海舟への贈呈品として蘇峰が依頼した。  
（大田区立勝海舟記念館所蔵）

註 (1)「小楠は封建割拠の、恰（あたか）も人間が目白やカナリヤの籠の中に生活しているが如き時代において『何ぞ富国に止まらん、何ぞ強兵に止まらん、大義を四海に布かんのみ』と言つた。彼は実に當時に於いて世界を狭しとする大規模、大見識があつたのだ。（横井小楠先生）」と蘇峰は述べている。